# アウグスティヌス『告白』第八巻における回心譚の効用について

## ――「おこない」の意味――

松崎一平

『告白』第八巻には、アウグスティヌス（とアリピウス）の回心が回想されている。それは、ミラノで、三八六年八月のある日、宮廷の高官である同郷のポンティキアヌスが所用で訪れた際に、二人に話して聞かせた回心譚に耳を傾けたことに促されて生じたできごとである。また、この日にどれほどか先立って、アウグスティヌスはミラノのカトリック教会の司祭であったシンプリキアヌスを訪ね、ウィクトリヌスの回心の仔細を知らされてもいた。それらの回心譚は、アウグスティヌスを回心へと促す上でどんな効用をもったのか、第八巻の前半を読み直して考察し、効用の背景をも探りたい。

### 一、なぜシンプリキアヌスを訪ねたのか

#### ――『告白』第八巻第一章――

第一章は、第八巻の序言的部分。アウグスティヌスは新プラトン派の書物を通してキリスト教の神を理解し、すでにカトリック教会の教えに納得していたが、信仰の道に入る決意ができず、深い逡巡の中にあり、それを克服するきっかけを得るためにシンプリキアヌスを訪ねようと決心する。その逡巡は端的にいって、肉欲を断ち切る決断ができないことに起因していた。

一節に、シンプリキアヌス訪問を思いついたことが語られている。

あなたは私の心の中に、シンプリキアヌスを訪れようという気持を送りこみになりました。これは善い思いつきだと私の目には思われました。この人はあなたの善いしもべであるように見えたのです。あなたの恵みは、この人のうちに光り輝いていました。(1)

おそらくアウグスティヌスはミラノの教会で、司祭を務めるシンプリキアヌスをたびたび目にし、そのおこないや表情から、相談するに値する人物であると判断したのであろう。「私の目には思われた」という、詩編に関係づけうる表現（本稿第五章（四）を参照のこと）は、このようなことを示していると思われる。アウグスティヌスがシンプリキアヌスを、相談するに値する人物であると判断した理由はまだある。続けて語られている。

さらに私は、この人が青年時代からきわめて信仰深くあなたに仕えて生きてきたということを聞いておりました。当時すでに老年でしたが、長い年月のあいだそんなに熱心にあなたの道に従ってきたのですから、たくさんのことを経験し、たくさんのことを学び知っているにちがいないと思われました。事実、そのとおりだったのです。

シンプリキアヌスのキリスト教徒としての非の打ち所のない生き方が教会に参集する人々の口の端にのぼることがあり、アウグスティヌスもそれを耳にしていた。そのおこないや表情を目にすることで、耳にしていたことの確かさを確信するようになったのだ。「事実、そのとおりだった」ということばは、シンプリキアヌス訪問の結果を含意していると考えたい。いずれにしても、相談の相手はシンプリキアヌスでなければならなかった。(2) ウィクトリヌスの回心譚は、訪ねる前に時間をかけ熟慮して得たシンプリキアヌスへの信頼があって初めてアウグスティヌの耳に入りえたのであり、こころを深く動かすことができたのである。

では何を相談したかったのか。

そこで私は、なやみをうちあけ、当時そういう状態に

あった自分が、あなたの道を歩むため、どうしたらいちばん適切であるかについて、助言を受けたいと思ったのです。

続く二節でアウグスティヌスは、教会に参集するキリスト教徒の生き方が様々であるのを知っていたという。ある人々は信仰しつつ結婚生活を営み、ある人々は純粋に信仰に生きるために独身生活を堅持していた。アウグスティヌスは、「自分は弱かった」から前者の道を歩まんとし、[3] 結婚生活を営もうとすることに付随する俗事に却って煩わされていたと回想する。

じっさい、彼はだいぶ前から、社会的な栄達や富裕へのあこがれはなくなっていた。学問に専念できる閑暇を得るために、世間を離れ共同生活を営もうと、親しい友人たちと相談した時期もあった。そのときも結婚生活との共存の困難が予想され、妻や婚約者を説得し結婚生活を放棄する見通しがもてず、計画は破棄された。[4] いずれにせよ、社会的栄達や富裕への希望を放棄することはアウグスティヌスにとって最も深刻な問題ではなかった。問題の核心は結婚生活の是非であり、きっかけは結婚生活に入ることに必然的に付随する煩わしさであった。信仰に専念するために独身生活を選択すべき（聖書はより善き道として勧めている）か、結婚生活を営みながら信仰の道を歩むべきか、彼は悩んでいた。モニカの配慮もあって現実には後者を選択しようとしていたが、付随する様々な煩わしさに悩み、前者を選ぶべきではないかと考えるようになっていたのである。

二節では、もう一つの生き方にも触れられる。

これとは別のたぐいの不敬虔な者たちもいます。それは、神を知りながら神として栄光を帰することなく、感謝もしない人々です。私もかつては、この仲間におちこみましたが、あなたはその右手で私をうけとり、そこからひきはなし、健康を回復できる場所においてくださいました。

「不敬虔な者たち」というのは、新プラトン派の書物に誘われて神を見、かつ突き放された状態にあった、『告白』第七巻が語るアウグスティヌス自身に相当する。[5] 彼は、その不敬虔な状態を乗り越え、キリスト教の信仰に専念できる生活の選択を考える地点まで来ていた。

## 二、シンプリキアヌスによるウィクトリヌスの回心譚
### ――『告白』第八巻第二章・第五章――

第二章（三・五節）。訪れたアウグスティヌスが、ウィクトリヌスによるラテン語訳で「プラトン派のある書物」を読んだことを話すと、シンプリキアヌスは喜び、ウィクトリヌスの想い出を話して聞かせる。高名な修辞学者であったウィクトリヌスが、まずは内的にキリスト教を受け入れ、さらに公に洗礼を受けるに到った経緯が、個人的に親しく、その経緯に深く関わったシンプリキアヌスによって物語られる。

四節に、ウィクトリヌスとシンプリキアヌスのやり取りが語られる。「聖書を読み、ありとあるキリスト教の書物を熱心に考究して極め尽くした」ウィクトリヌスが、極めて親しかったシンプリキアヌスに、自分がすでにキリスト教徒であると秘かに告げる。シンプリキアヌスは、「わたしは信じられないし、キリストの教会の中であなたを見ない限りは、あなたをキリスト教徒の中に数えない」と応じる。するとウィクトリヌスは、「では壁がキリスト教徒をつくるのか」と批判する。やり取りを繰り返す傍らウィクトリヌスは、おそらく聖書を読み、さらに強く神を求めるようになり、洗礼を受ける決断をするに到ったというのである。

アウグスティヌスは、洗礼を受ける前の、自分はすでにキリスト教徒だと秘かに告知したウィクトリヌスよりもやや前進していた。正しい道は教会にあることを知っていたのだから。ウィクトリヌスも前進し、多くの信者たちが見まもる中、教会で洗礼を受けるに到り、教会は歓喜の渦に飲み込まれた。

人は、洗礼という、身体をもってする一つのおこない[6]を通して初めてキリスト教徒になることができる。ウィクトリヌスの回心譚は、このことを伝えるために語られたのだ。

続く第三章（六・八節）でアウグスティヌスは、ウィクトリヌスの回心が教会に大きな歓喜をもたらしたことについて、「人間の中で何がおこなわれて、人間は、絶望視されていたたましいの極めて大きな危険からの救いについて、常に希望がありわずかな危険しかなかった場合よりも、いっそう喜ぶのか」と問い、困難や苦痛が大きいほど、それを乗り越えた喜びは大きいことは、時間的被造物に固有のあ

り方だと指摘する。さらに第四章九節で、高名な人物の回心が無名の人物のそれよりもよろこばれるのはなぜかと問い、周囲に与える影響の多少によるとする。

第五章（一〇‐一二節）の冒頭でアウグスティヌスは、シンプリキアヌス訪問の時点に戻り、ウィクトリヌスの回心譚を聞き終えたときの気持を回想する。

> さて、あなたのしもべシンプリキアヌスが、ウィクトリヌスについてそのような話をしたとき、私は彼にならいたい思いに燃えあがりました。じっさい、その話をしたのも、私にその気持をおこさせるためだったのです。

ウィクトリヌスの回心の仔細を聞いたアウグスティヌスは、シンプリキアヌスの思惑どおり、倣いたいと燃え始めたが、直ちに倣おうとしたわけではなかった。

ウィクトリヌスは、神を知るべく聖書を読むことによって知的にキリスト教に納得。さらに遅滞することなく着実に読み進め、神を求めるうちに、洗礼を受ける決断に到った。[8] じっさい、シンプリキアヌスとの間で交わされた「壁」のやり取りは、必ずしも差し迫ったものではなく、遅滞のない思索の歩みを推測させる、余裕のある、機知に富むものだったと思われる。ウィクトリヌスが最初、信仰の公表を控え、受洗を無用とする立場を取ったのは、修辞学者として師弟関係を結んでいたローマの貴顕たちが異教徒である現実に配慮したから、つまり世俗とのつながりを断ち切れなかったからである。また、ウィクトリヌスの受洗の決意は、世俗とのつながりを必ずしも完全に断ち切ろうとするものではなく、おそらく聖書を読み、例えばルカ伝一二章八節以下の「言っておくが、だれでも人々の前で自分をわたしの仲間であると言い表す者は、人の子も神の天使たちの前で、その人を自分の仲間であると言い表す。……」（新共同訳）といったことばの理解が進み、貴顕たちの反撥を恐れる気持を克服できたことによるものであろう。アウグスティヌスが倣いたいと思ったウィクトリヌスの回心とは、このようなものであった。

シンプリキアヌスは、さらに以下の後日談を附加した。キリスト教徒は修辞学を公に教えてはならないという禁令が出された際にウィクトリヌスは修辞学教師を辞め、「神に献身する機会」を見いだした。これを聞いたアウグスティヌスは、ウィクトリヌスは強いというより、むしろ運の良

い人だと思ったという。その受洗に倣いたい気持が燃え始めたが、倣うことは容易ではないという自覚が彼にはあった。自分に困難なことを、ウィクトリヌスは禁令という外的機会に恵まれ実現できた。アウグスティヌスはそれがうらやましかった。彼は、すでにシンプリキアヌス訪問以前に、ある意味で修辞学教師の職を捨てたウィクトリヌスと同じところにいた。すでに二節でいわれている。

私はもう、この世であくせくするのがいやになっていました。それは非常に大きな重荷であり、名誉と金銭の欲望にかられて、あのように重い屈従の生活を甘受するだけの熱情が、以前のように燃えあがらなくなっていたのです。それらのものは、あなたの甘美と、愛するあなたの家の美しさにくらべるとき、もう自分をよろこばせなくなりました。

アウグスティヌスは、洗礼を受ける決意ができない自分と比べて、ウィクトリヌスに倣いたいと思う一方で、世俗的な価値の放棄については、外的な圧力をきっかけにすることができた後者に距離を感じている。いまウィクトリヌスの受洗を回心と呼ぶなら、それは世俗的価値（修辞学教師の地位）の完全な放棄を意味しなかった。ウィクトリヌスの場合、世俗的価値の最後的放棄は、回心に遅れて実現される。だがアウグスティヌスにとって、それはすでに放棄してよいものだった。端的にいって、問題は肉欲（性欲）だった。習慣化し必然と化した肉欲に縛られていたのである[9]。アウグスティヌスには肉欲の紐帯が重くのしかかっていたが、ウィクトリヌスの回心譚には肉欲の放棄に関わる話題は希薄だった。そこにウィクトリヌスの幸運をうらやむ理由があった。

それでも、ウィクトリヌスに倣いたいと燃え始めたことは、キリスト教の信仰を受洗によって受け入れたいという新たな意志が生じたことを意味する。これは禁欲的生の希求を含意し、逡巡を克服したい気持が強まったということである。皮肉なことに、この点への示唆はウィクトリヌスの回心譚には含まれていなかった。アウグスティヌスの回心は、ウィクトリヌスに必ずしも完全に倣うものではなかった。以後の記述は、アウグスティヌスの内面に生じた、習慣となり必然と化した肉欲の背後にある古き意志と新たな意志との激しい葛藤の始終を縦糸とする。アウグスティヌ

スにとって、新しい意志を生み出したキリスト教の神に関する知は、すでに完全に確実で疑いないものであった。その知は、洗礼の必要性と受洗が含意する禁欲生活の正しさとを含むゆえに、新たな意志と古き意志との厳しい葛藤を生み出さざるを得なかった。

## 三、ポンティキアヌスによる回心譚

### ――第六章 - 第七章――

#### （一） ポンティキアヌスの人となり

第六章一三節は回心当日のことを語り始めるところであり、共に暮らしていた親友、アリピウスとネブリディウスの当時の状況が説明される。[10] 続く第六章一四節で、ネブリディウスの不在時に訪れたポンティキアヌスが、アウグスティヌスがパウロ書簡ばかりを熱心に読んでいると知って祝福する。そこのところで、ポンティキアヌスの人となりが簡潔に説明されている。

じっさい、彼はキリスト教徒であり、しかも熱心な信者だったのです。そしてしばしば教会で、「われらの神」であるあなたの御前にひざまずき、くりかえし長い祈りにふけっていました。[11]

シンプリキアヌスの場合と同じく、アウグスティヌスはポンティキアヌスを教会で、おそらくいくども目にしていた。その立ち居振る舞いに基づき、キリスト教徒として信頼していた。ポンティキアヌスの語る回心譚がアウグスティヌスに大きな影響を与え得た前提が、ここにある。

#### （二） アントニウスの回心譚

アウグスティヌスがパウロ書簡を熱心に読んでいると知ったポンティキアヌスは、聖書やキリスト教の話を始め、偶然、エジプトの隠修士アントニウスを話題にしたという。だが、第六章では話の内容はほとんど明かされない。それが『告白』の読者に知らされるのは、巻末（第一二章二九節）で、アウグスティヌスが「取れ、読め」の声を聞いた直後であり、その声に促されてロマ書を開く直前である。彼がそうしたのは、アントニウスの話がヒントになったからである。

じっさい私は、たまたま来あわせた教会の福音朗読で、「行って、汝の有するすべてのものを売り、貧者に施せ。さらば汝は天に宝を得るであろう。そして、来たり、われに従え」（マタイ伝一九章二一節）と読まれることばを、あたかも自分にたいする忠告であるかのようにうけとり、このお告げによってただちに御許に立ちかえったというアントニウスの話を聞いていました。[12]

この箇所から、話題となったアントニウスの物語の核心の一つが、アレクサンドリアのアタナシウスによる『アントニウス伝』*De uita Antonii* の第二章に対応していたことが判明する。それは大略、次のような内容である。

エジプトの高貴で裕福な家に生まれたアントニウスは、両親が熱心なキリスト教であったため、幼い頃から聖書に親しみキリスト教の教えに親しんでいた。二〇歳のときに両親が死に、幼い妹と二人残されたアントニウスは、家を捨て主に従った使徒たちに倣いたいと思いつつ、教会に行き、そこでマタイ伝一九章二一節が朗読されるのを聞き、直ちに家に戻り、福音書の勧めに従って家や財産を処分し、妹の将来に配慮した上で財産を貧者に施し、厳しい信仰生活を選び取った。[13]

ここで重要なことは、アントニウスの「回心」が、財産を放棄するキリスト教的禁欲生活の実現であったということ。おそらくアントニウスは、すでに熱心なキリスト教徒として世俗的生活を営んでいたが、使徒に倣って世を捨てることを希望し、たまたま耳にしたマタイ伝のことばに促されて直ちに決断したということである（福音書のことばは決断の最後の一押し）。だが、ウィクトリヌスの回心譚とは異なり、その話を聞き直ちに倣いたいと思ったとアウグスティヌスはいわない。アントニウスは無学であり、境遇上、近しさを感じうる人物ではなかったからか。

さて、アウグスティヌスとアリピウスは初めて耳にしたアントニウスの生き方に驚き、ポンティキアヌスは高名なアントニウスについて二人が全く知らなかったことに驚いた。三人は互いに驚きながら（切迫を直後に控えたくつろぎというべきユーモアが感じらないだろうか）、ポンティキアヌスの話はさらに続き、修道院に住む人々の群れ、その暮らしぶり、荒れ野の隠修士の霊的豊かさが話題になる。ミラノの市壁の外にアンブロシウスの庇護下の修道院があることも話題にあがった。いずれもアウグスティヌスたち

には未知のこと。自分たちの住む都市にすでに修道院があり、独身生活を選んだキリスト教徒たちがいると知ったことで、二人は理想とする生を大いに身近に感じるようになっただろう。

### (三) トリアーの二人の官吏の回心譚

話は進展し、第六章一五節で、ポンティキアヌスは次のような体験談を話す。

ある日、皇帝がトリアーの円形競技場で競技を楽しんでいた間、彼は同僚の官吏三人と皇帝のもとを離れ、競技場近くの、市壁に隣接する庭園を散策した。二人ずつ二組で別々に歩いていて、ポンティキアヌスを含まぬ二人連れは世を捨てたキリスト教徒たちが住む庵に入り、たまたま目にした『アントニウス伝』をきっかけに、一人が直ちに世を捨てその庵に留まる決心をし、もう一人もそれに従った。日が傾き始めたころ、行きあわせたポンティキアヌスたちは事情を知り、二人を祝福しつつも、倣うことができず重い気持で宮廷に戻った。官吏二人の突然の決断は、二人の許婚にも同じ決断をもたらしたという。二人の回心譚は、さらなる二人のそれを内包していた。

以上がトリアーの回心譚の骨子である。ポンティキアヌスを含む四人の官吏は、おそらく熱心なキリスト信者でもあった。二人の回心譚の核心は、たまたま読んだ『アントニウス伝』に触発されて直ちに世俗的な地位と栄達の希望を捨てたことだけでなく、共に婚約者がいたにもかかわらず結婚を放棄した点にもある。その突然の（端から見れば乱暴極まりない）決断を、婚約者たちも受け入れて、共に世を捨てて禁欲生活に入ったという後日談も、アウグスティヌスには大きな意味をもったのではないか。

なぜ二人の官吏は突然、大きな決断をしたのか。第一に、二人は妬みや陰謀のうずまく宮廷で栄達することの困難と、栄達が必然的にもたらす脆さとに、いつも大きな疑念と激しい不安を感じていたから。第二に、キリスト教が理想とする禁欲的生活の意義を理解していたから。（以上はアウグスティヌス自身の語るところ。）第三に、『アントニウス伝』を読むことで世俗的価値の放棄を極めて大胆かつ劇的に実行したアントニウスの行動を知ったから。第四に、まさにそこ（庵）に世俗的価値を放棄し禁欲生活を営んでいる信者がいたから。以上の四点が重なったからである。倣うべきことが明白になり、倣った人々が極めて身近に、容

易に倣えるところにいたからである。

### （四） アウグスティヌスの内面に生じた葛藤

続く第七章一六節で、回心譚に耳を傾けていたアウグスティヌスの内面に生じた激しい葛藤が語られる。彼は、ウィクトリヌスの回心譚を聞いたときのように、倣いたいという気持で燃えあがったとはいわない。二人に比べて自分を醜くいと感じ、いわば自己嫌悪に陥ったという。一七節の始めで彼は、二人を激しく愛し、愛すれば愛するほど自分をいっそうひどく憎んだという。

彼は、いわゆる『ホルテンシウス』体験以来の自らの「知恵の研鑽」の経過を簡潔にたどり、批判する。「地上的な幸福」を軽視すべきであったのに、そうはせず、知恵の探求に専念することを、いままで引き延ばしてきたという。

しかしその私は、青年時代まことにみじめな者でしたが、その時代のはじめ、すでにみじめな状態であったにもかかわらず、あなたから貞潔の徳をもとめたことがありました。けれども私は、「われに貞潔とつつしみの徳を与えたまえ。されども、いますぐに与えたもうな」といいました。というのは、あなたがそくざに願いを聞きとどけられ、そくざに肉欲の病をいやしてくださっては困ると思ったからです。私は肉欲が根絶されるよりはむしろ、みたされることのほうをのぞんでいたのでした。

「その時代のはじめ」がマニ教時代を含むか否かは問題だが、いずれにせよアウグスティヌスは、自分が知恵の探求への専念を引き延ばしてきたのは地上的な幸福に執着したからだという。言い訳になったのは、進路を定めるべき何らか確実なことが現れていなかったということだった。一八節で彼はいう。

しかしついに、私が自分自身の前にまるはだかにされて、良心（conscientia）が私にむかってこのように面詰する日がきたのです。「おまえの舌はどこにいる。たしかにおまえは、真なることがまだ不確実だから、虚妄の重荷を投げすてる気になれないのだといっていたな。いまはもう確実だ。それなのにおまえは、まだその重荷に抑えつけられている。ところがあの人々は、もっと軽快なその肩に、翼をうけた。彼らはおまえにように、探

求のため心身を消耗することもなく、十年以上もそういうことがらを思いめぐらすこともなかったのに。」

ポンティキアヌスが話をしているあいだ、わたしの内心はそのように責めさいなまれ、恐ろしい羞恥心にはげしくかきみだされていました。

トリアーの二人の回心譚を聞くことでアウグスティヌスが陥ったのは、自らの醜さを思い知らされたゆえの激しい自己嫌悪であり、激しい羞恥心であった。洗礼を拒む論拠は完全に尽き果てていた。

## 四、回心譚の説得力

### （一）話し手の資格

以上のように『告白』第八巻前半には、ウィクトリヌス、アントニウス、トリアーの二人の官吏（そして二人の許婚）の回心譚が語られており、アウグスティヌスはどれにも聞き手として耳を傾けた。耳を傾けた話が聞き手にとって真実として説得的であるためには、話し手への信頼が不可欠である。

アウグスティヌスは、訪問を決意する前にシンプリキアヌスの人となりについて熟慮を重ねたようである。その際、彼が聖職者である事実が何らか意味をもっただろう。この点に関して、シンプリキアヌスでなければならなかった理由は分からない（アンブロシウスは忙しかったのか）。アウグスティヌスが重視したのは、彼が目に見えるところでいかにあるか、つまり彼の日々のおこないであった。[14] むろん、アウグスティヌスがそれを目にすることができたのは、彼が教会で司祭の務めを果たしているとき。立ち居振る舞いや表情が判断の材料だったに違いない。人となりや過去の生き方について、聞いていたことを確かめたのも同様だっただろう。

ポンティキアヌスの場合も、他のことには全く触れず、教会でどのように祈っていたか、アウグスティヌスは簡潔に指摘する。アウグスティヌスは、祈る姿勢、その表情をじっと見つめ、彼がキリスト教徒として信頼できる人だと見て取った。ポンティキアヌスの話がそうして得た信頼感を裏切らなかったため、話の内容に何の疑念も抱かず、極めて熱心に耳を傾けた。

### （二）回心譚のポイントは何だったのか

アウグスティヌスにとって、ウィクトリヌスは知的にも経歴的にも同等であり、その生き方にあまり距離感をもたなかっただろう。倣いたい気持に燃え始めたのは当然のこと。倣おうとする人にとって、倣う対象は、倣える可能性が実感できるものでなければならない。この場合、倣うべきこととは、洗礼を受けて正式にカトリック教会の一員になること、さらに、キリスト教的禁欲生活に専念することだった。彼にとってキリスト教を選択することは、洗礼を、禁欲生活をおこなうことをもってその本質とする一つの徹底した生き方を選択することにほかならなかった。

ウィクトリヌスの回心（受洗）は、聖書を学び、シンプリキアヌスと議論を重ねるうちにそのことに気がついた結果である。一方、アウグスティヌスが倣いたいと燃えあがったのは、肉欲への執着のゆえに実行できないでいた入信（受洗）に関してだった。だが燃え上がり方は十分ではなかった。ウィクトリヌスが修辞学教師の地位を捨てたのは受洗のかなり後のこと。この点でその回心は不徹底だった。また肉欲の問題はウィクトリヌスには（たぶんシンプリキアヌスにも）無縁であった。このように、ウィクトリヌスの回心譚はアウグスティヌスの苦悩の核心からやや逸れていた。

ポンティキアヌスの話のうち、アントニウスの回心譚は、地上的な幸福を完全に放棄したという点で、アウグスティヌスにとって大きな意味をもったに違いない。だが、リアリティーはいくらか乏しかったのではないか。『アントニウス伝』を読んだのか、伝聞によったのか、ポンティキアヌスの情報源ははっきりしないが、何よりもエジプトのできごとだし、アントニウスは生まれながらの熱心な信者だった。この点で、アウグスティヌスとは距離がある。じっさい、聞いた直後の感情として回想されているのは、驚きの気持である。[15] 話は続き、ミラノ近郊にアンブロシウスが庇護する修道院があり、アントニウスと同様に信仰に専念する人々が現にいることを知ったとき、リアリティーは大いに高まった。そこにトリアーの二人の回心譚が来る。

二人は宮廷で栄達を願う官吏であり許婚もいる（アウグスティヌスとよく似た境遇！）。官吏としての将来は、同僚だったポンティキアヌスがいま宮廷で高位を占めていることから容易に推測できる。アウグスティヌスは、自分の身に起きても不思議でないこととして耳を傾けることがで

きただろう。回心譚の中身を、さらによく見てみよう。二人の官吏が『アントニウス伝』を読んだのは、アントニウスに倣った生き方を実行する修道士たちが暮らす庵において。そばに修道士たちがいたか、いないにしても彼らの暮らしぶりが実感できる場所において。伝記が語る生き方がその場に確かに息づいていたゆえ、非常な説得力をもって二人に迫ったことであろう。二人の許婚も、婚約者たちに倣って世を捨て、信仰に専念する生き方を選んだという。二人の官吏が許婚から信頼されていた証しとして受け取られたことだろう（その信頼はアウグスティヌスによって共有されたのではないか）。ポンティキアヌスによる回心譚の回想がここで切り上げられることは示唆的である。[16] その核心には、二組の男女が肉欲を否定した決断があったのだ。

アウグスティヌスは、いくつもの回心譚を耳にするたびに、自分により類似する人物に向き合うことになっていった。トリアーでの回心が二人に生じたことも、アウグスティヌスがアリピウスと二人だったゆえに、いっそう切実な話となっただろう。いずれにしても、回心譚は、当事者がどのような生き方をどう選び取り、どう実行したかを核心にもつ。加えて、話し手がどのような生き方をしていたかが、聞き手が話し手に寄せる信頼の度合いに密接に関連する。（修辞学の力量ではなく）おこないの集積というべきその生き方が、話しに説得力（リアリティー）を与える。

ではアウグスティヌスは、おこないをどう位置づけるのか。

## 五、アウグスティヌスにとって「おこない」とは？

### （一）*Enarr. in* Ps. 149, 2.

注目したいのは『詩編講解』「第一四九詩編講解」（以下「講解」）二節である。[17] 対象となる詩編の本文は、「あなたがたは主のために、新しい歌をうたいなさい、聖なる者たちの集まり〔教会〕における主への賞讃を。」[18]「講解」の一節でアウグスティヌスは、「新しい歌」とは新約を意味するとする。「新しい歌」をうたう人は永遠の生命であるキリストを愛しており、永遠の生命に帰属し始めている。続く二節でアウグスティヌスは、「新しい歌」は平和の歌であり愛の歌でもあるという。だから「新しい歌」は、それをうたう人々が「全地と共に」うたうべきである。「全地と共に」とは、「キリストの愛においてこころを一つにし

て」ということ。だが、アウグスティヌスによると、「新しい歌」をうたっている人々がみな、こころを一つにしているわけではない。では、共にうたっているがこころを一つにしていない人々は、いかに見分けられるのか。

じっさい、彼が何を考えているか分かっているとき、どうしてわたしは彼が何を語るか注意するだろうか。あなたはいう、ではあなたは彼が何を考えているか分かるのかと。おこない facta が示している。じっさい、目は conscientia[19] の中に浸透しない。わたしは彼が何をおこなうかに注意し、それで理解する、彼が何を考えているかを。というのも、例えば、盗みで、殺人で、姦通で人を捕まえる場合、だれもがその人の考えを、こころ cor の中ではなく、おこないの中に見ている。内に隠れていることがある。だが、業 opera の中に出現し、人々にも明示される多くのこともある。それゆえ、キリストの愛の結合から、聖なる教会の社会から自らを切り離した者たちが存在していても、悪しき者たちは彼ら自身の内面にあって、神のみの知るところだ。試練が訪れた。試練が彼らを切り離し[20]、神の知るところが人間たちに露わになった。じっさい、果実はただおこないにおいてのみ示される。だからいわれた、「彼らの果実から、あなたがたは彼らを見分ける」（マタイ伝第七章一六節）と。[21]

いわれているのは、次のようなことである。例えば、教会でキリスト教徒として詩編をうたっている人がいる。だが、その人の口から発せられていることばによって、その人が真のキリスト教徒とわかるわけではない。彼がこころの中で考えていることが、口から発せられることばと同じというわけではない。人のこころの中を、いったい人は何によって知るのか。アウグスティヌスはおこないによって知るという。むろん、こころの中がみなおこないとして現れるわけではない。[22] だが、多くのことがおこないを通して知られうる。悪意のあるなしは、それがおこないとして現れない限り、外から見て取ることはできない。アウグスティヌスは、こころとことばとおこないの三つの要素をもって人間を捉え、こころを知るには、ことば（何を語るか）よりも、おこない（何をおこなうか）による方が有効であるといっている。そして、こころ、ことば、おこないのすべ

てで神を讃美することが、キリスト教徒のまことの生き方であると説く。[23]

### (二) *Sermones de Vetere testamento*, 37, 6

いま一つ、目を通しておきたいのは、『旧約聖書説教』第三七編六節（四一〇年）である。「（有能な妻は）羊毛と亜麻を求め、手ずから望みどおりのものに仕立てる」（新共同訳）という箴言の一句（第三一章一三節）に関するもの。アウグスティヌスは上着の素材の「羊毛」は肉的なものを、下着の素材である「亜麻」は霊的なものを意味するという。

わたしたちが肉においておこなうことはみな露わである。霊においておこなうことはみな隠れている。ところで、肉においておこない霊においておこなわないことは、たとえ善いことと見られても、有益ではない。一方、霊においておこない肉においておこなわないことは、怠惰な人々のものだ。あなたは見いだす、貧者に手で施し物を差し出しているのに、そのとき神について考えていずに、人々を喜ばせたがっている人を。羊毛製の上着は見られるが、彼は亜麻布の下着をもたない。あなたは別な人があなたに語るのを見いだす、「conscientia の中で神を崇め神を拝することで、わたしには十分だ。教会に行ったり目に見える仕方でキリスト教徒たちと交わったりする必要が、どうしてわたしにあるのか」と。この人は上着なしで亜麻布をもちたがっている。この婦人は、そのようなおこないを知りもしないし勧めてもいない。じっさい、肉的なことがらなしに霊的なことがらは語られ教えられるべきだが、受け取る人々は、霊的なことがらを保持しなければならず、肉的な仕方によらずに肉的なことがらをおこなわなければならない。この婦人は、「羊毛と亜麻を見いだし、手ずから有益なものとした。」それらの羊毛とこの亜麻は聖書の中にある。多くの人々が見いだすが、自らの手で有益な何かをつくることを望まない。婦人は見いだして、つくった。耳を傾けるなら、あなたがたは見いだす。[24] よく生きているなら、あなたがたはおこなっている。

### (三) 「おこない」とは？

このように、アウグスティヌスにとって、人間（キリス

ト教徒と限定する必要はない）の正しい生き方は、conscientia と、肉体をもっておこなわれる facere, agere, operari（明確には区別されていない）の集積としての生（facta）とが、ともに聖書の教えに適ったものでなければならなかった。つまり、conscientia は、多くの場合おこないの正しさを伴わざるをえないもの（キリスト教の信仰と洗礼の関係が象徴的）だということ。おこないは当然、可視的・可感的で、他者に開かれており、他者によってもおこなわれ（模倣され）うるもので、いわば社会的・相互的な性格をもつ。例えば独住の隠修士アントニウスの禁欲生活は、決してアントニウスにおいて孤立せず、追従する人々がいたからトリアーの二人につながった。一方、conscientia に基づく知は、ことばによっても表現されうる。ことばによって表現されうる知がおこないを付随するものであれば、おこないのいかんによって、その知の是非が検証されうる。アウグスティヌスがシンプリキアヌスやポンティキアヌスの「おこない」を書き留めるのは、このゆえである。

ところで、同じおこないを繰り返すと、それは習慣と化す。conscientia に基づくおこないといえども、いったん習慣化したら、conscientia をそのつど前提とするわけではない。習慣化したおこないから conscientia が乖離することもあるだろう。注意して見る（adtendere）必要がある所以である。さらに、習慣化したおこないが否定され、新たな意志により新たなおこないが実現されようとするとき、肉体はそれに抗って何らかこわばったり麻痺したりする。『告白』第八巻前半で回想されるアウグスティヌスの状態は、まさにそのようであった。上述のように[25]、ポンティキアヌスが語る回心譚の山場（第七章一八節）で彼を責めたのは conscientia だった。トリアーの二人によっておこなわれたことは、conscientia がアウグスティヌスに要求するおこないと（おこなった二人の境遇も二人によっておこなわれたことも）酷似していた。模倣すべきおこないが極めて説得的に明示されたのである。conscientia は、彼らに倣っておこなうようアウグスティヌスに求めたのだった。

### （四）人は「おこない」から知られるか？

しかし人のおこないから人の conscientia を知ることは、だれにでもできることだろうか。

『告白』第八巻の回心譚が物語るおこないのうち、受洗とか財産の放棄とか、あるいは独身の維持とかは、キリスト教の信仰がそれをおこなうことを信徒に求める、極めて重大な、まさにアウグスティヌスの回心がそうであるように、人の生き方の根本（信仰の核心）に関わるものである。この種のおこないを実行した人の conscientia は、当のそのおこないによって明白に知られるとアウグスティヌスは考えているのだろうか。必ずしもそうではないと思われる。「第三七編旧約聖書説教」六節で語られている、「貧者に手で施し物を差し出しているのに、神について考えず、人々を喜ばせたがっている人」とは、おそらく洗礼を受けた信者である。そうであって初めて説教は会衆に強いインパクトを与えるものとなる。先に見た「第一四九詩編講解」二節からしても、そうではないと思われる。そこで問題にされているのは、教会にあって共に詩編をうたっている人々である。

一方、アウグスティヌスは、そのような人が何を考えているかは、うたって（口の端にのぼって）いることばによって知られるわけではなく、その人が何をおこなうか注意することによって理解されるといっている。しかも、一人称で「わたしは」と。

わたしは彼が何を行うか注意し、それにおいて理解する、彼が何を考えているかを。

Adtendo quid agat, et ibi intellego quid cogitet.

アウグスティヌスは、人が何をおこなうかに注意することによって、自分はその人が何を考えているか分かるといっている。いわれている「おこない」とは、習慣化されうる体の、人々の日々のおこないである。それは、おそらくヒッポ・レギウスの司教の人生体験に根ざしたことばである。四半世紀前、アウグスティヌスがシンプリキアヌスを信頼し、彼を訪ねようと決断したことは、その体験の一つではないか。ポンティキアヌスを信頼し、話に耳を傾けたのも、その体験の一つではないか。

アウグスティヌスが、シンプリキアヌスが相談するに相応しい人物であると判断したことを回想する際に、「私の目には（in conspectu）思われた」という、詩編に関係づけうる表現があった。in conspectu という表現は詩編で五〇箇所ほど見いだされ、どこに関係づけるべきか判断

するのは容易なことではないからか、校訂本や近代語訳がこの箇所で参照箇所として詩編を上げる例はそれほど多くない。[26] 上げる場合、第一五編八節、第一八編一五節、第二二編五節、第四九編八節のいずれか、あるいはその中の二ないし三箇所である。上記四カ所に関して簡単に整理すると、いずれの場合も神と人との対峙関係が意味されている。第二二編五節を除く三カ所は、神に対する人間のあるべきあり方を語っている。神が見ているものとして神にこころを向けるべきだといっている。

チャドウィックがあげる第一八編第一五節、「わたしの口のことばがよろこばしいものであるように、そして、わたしのこころの思いがつねにあなたの眼の前にありますように」を、「第一八詩編第一講解」一五節（三九二年）で、アウグスティヌスは以下のように解釈する。

わたしのこころの思いは、もういかなる高ぶりにもないので、人々に気に入られるための虚勢には向かわず、いつもあなたの目の前にある。あなたは清らかな conscientia を見そなわすから。[27]

四一一年末ないし四一二年頃の成立と推定されている「同第二講解」一六節では、同じく以下のように説明されている。

へりくだるたましいは、神が見ているかくれたところで気に入られることを望む。それは、彼が善きおこないで人々に気に入っても、善きおこないを気に入った人々を彼が喜び、善きおこないをおこなったことで十分としなければならない自分を喜ばないようにするためである。いっている、「わたしたちの栄光、これは、わたしたちの conscientia の証しだ」（コリント後書第一章一二節）と。[28]

人が、いつも神の目の前にいるかのように神に誠実に（善き conscientia に基づいて）おこなっているかどうか、アウグスティヌスは三九二年から四一一年頃に到るまで、人のおこないを見る際に、一貫して念頭に置いていたのではないか。アウグスティヌスのその眼差しは、さらに遡って彼の回心をもたらす力にもなったのではあるまいか。[29]

## むすび

以上の理解が的を射たものなら、アウグスティヌスが他者に自分を知らせようとするとき、自分がどのようにおこなってきたか、すなわち、自分の生き方を回想することによって知らせることがあっても、不思議なことではない。自分がどうおこなってきたかは必然的に、自分がどのような人々とどのように関わってきたかと共に語られるだろう。『告白』に、アウグスティヌスの様々なおこないが意図とともに語られ自己批判される所以と、様々な人々の様々なおこない様々な生き方が語られている所以とが、ここにありはしないだろうか。

### 注

(1) et inmisisti in mentem meam uisumque est bonum *in conspectu meo* pergere ad Simplicianum, qui *mihi bonus apparebat* seruus tuus et lucebat in eo gratia tua. なお、『告白』のテキストは Desclée 版、『告白』の日本語訳は可能な限り山田訳を拝借した。また、紙幅の関係上、注は必要最小限に留めた。

(2) 『告白』第六巻第三章三節によると、かつてアウグスティヌスは、アンブロシウスに何ごとかを尋ねたいと思い、機会を探していたのに、その多忙を極める生活を見て諦めたことがあった。このエピソードは、アウグスティヌスが思い立ったら矢も楯もたまらず実行に移すたちの人ではなかったことを示している。アウグスティヌスは、だれに、何を、いつ、どのように相談すべきか、よく考え、相手の様子をよく見て、それが相談するに適した人で、しかも迷惑にならないと判断した上で（遠慮がちに）実行に移す人だった。

(3) アウグスティヌスはこのとき婚約しており、おそらく結婚に向けて準備を行う必要があった。婚約者の家ばかりでなく、自分の家族とのやり取りなどで、様々な気苦労があったであろう。また、婚約者の家の社会的地位が高ければ、それだけ苦労も多かったであろう。

(4) *cf. Conf.* 6, 14, 24.

(5) *cf.* James J. O'Donnell, *Augustine*, Confessions, III, *Commentary on Books* 8-13, *Indexes*, Oxford U.P. 1992, p. 11.

(6) オドネルは cult と呼ぶ。*cf.* O'Donnell, *op. cit.* pp. 21-22.

(7) 高名な人物が異教徒にとどまる場合には、周囲の異教徒たちの異教的態度の強化を招来し、キリスト教に回心する場合には多くの追従者が生ずるであろう。アウグスティヌスは、

第四章を記述するにあたって、このようなことを念頭に置いていると思われる。

ところで、「絶望視されていたたましい」はウィクトリヌスを、「常に希望がありわずかな危険しかなかった」者はシンプリキアヌスを暗に示しているのかもしれない。キリスト教徒として理想的なのは前者かもしれないが、アウグスティヌスの回心に大きな影響（倣いたいという）を与えたのは、後者の生き方であり、前者はそれをアウグスティヌスに教えた点で専ら重要である。もっとも、アウグスティヌスのそれまでの歩みが、シンプリキアヌスに倣う可能性を閉ざしていた。

(8) こう考えても、話し手のシンプリキアヌスが、ウィクトリヌスの受洗の決断を突然のこととして物語ることと矛盾しない。人が持続的な思索の結果を他者に表明するとき、他者がその思索を親密に共有していないかぎり、いつも突然のことに感じられるだろう。

(9) *Conf.* 8, 5, 10.

(10) オドネルは、第一章一節を Introduction と、第六章一三節を Second introduction と呼ぶ。*cf.* O'Donnell, *op. cit.* p. 3.

(11) *Conf.* 8, 6, 14, chrisitianus quippe et fidelis erat et *saepe tibi, deo nostro, prosternebatur* in ecclesia *crebris et diuturnis orationibus.* prosternebatur という表現はとても視覚的だと思う。

(12) *Conf.* 8, 12, 29.

(13) 小高毅訳「アントニオス伝」（『中世思想原典集成1・初期ギリシア教父』、一九九五、所収）を参考にした。

(14) 本稿第一章で見たように、アウグスティヌスはシンプリキアヌスについて、「この人はあなたの善いしもべであるように見えたのです。あなたの恵みは、この人のうちに光り輝いていました」といっている。これは、シンプリキアヌスが信仰厚い司祭であることが直ちに見て取れたということであろう。だからといって、彼が相談の相手として相応しいということではあるまい。アウグスティヌスがシンプリキアヌスのおこないを通して見て取ろうとしたのは、まさにこの点ではないか。

(15) *Conf.* 8, 6, 14, *omnes mirabamur*, et *nos*, quia *tam magna* erant, et ille, quia inaudita nobis erant.

(16) アウグスティヌスが婚約者たち二人の後日談でポンティキアヌスの話の再話を切り上げ、自己の内部に生じた混乱を語り始めることは示唆的である。ポンティキアヌスによる回心譚の頂点は、二人の処女の回心かもしれない。*Conf.* 8, 6, 15, et habebant ambo sponsas: quae posteaquam hoc audierunt, dicauerunt etiam ipsae uirginitatem tibi. なお、第六巻の回想を、アデオダトゥスの母親との離別を言葉少なに語って終えているのと、どこか相通ずるところがある。

(17) 従来この「講解」は、四一一年から四一三年の間にカルタゴで行われたと考えられてきた。Franco Gori は、二〇〇

五年刊の新しい校訂本（CSEL. vol. XCV/5）で、三九七-四〇六年頃の成立と推定している。それなら、『告白』と同時期ということになる。

(18) *Ps.* 149, 1, *Cantate Domino canticum nouum*, laus eius in ecclesia sanctorum.

(19) 本稿では conscientia には訳語を与えない。以下に見るように、「おこない」の問題は、conscientia の問題と密接に関連する。conscientia の意味については、稿を改めて考察する予定である。

(20) 「打ち負かし」という読みもある。

(21) *Enarr. in* Ps. 149, 2, Quid enim adtendo quid sonet, cum uideo quid cogitet? Et tu, inquis, uides quid cogitet? Facta indicant. Nam oculus in *conscientiam* non penetrat. *Adtendo quid agat, et ibi intellego quid cogitet.* Neque enim si quisque, uerbi gratia, comprehenderit hominem in furto, in homicidio, in adulterio, cogitationes ipsius in corde uidet, sed in factis. Sunt quaedam quae intus latent; sed sunt et multa quae procedunt in opera, et manifesta fiunt etiam hominibus. Cum ergo essent illi qui se a compage Christi caritatis et societate sanctae ecclesiae separarunt, mali intus apud se, non nouerat nisi Deus. Venit tentatio; separauit illos, et patefecit hominibus quod nouerat Deus. Non enim fructus ostenditur nisi in factis. Vnde dictum est: *Ex fructibus eorum cognoscetis eos.* なお、*Enarr. in* Ps. のテキストは CC. による。

(22) それゆえ、他者に知られるためには、conscientia が語り出される必要もある。「告白」が必要な所以である。*cf. Conf.* 10, 3, 4, ... auris eorum non est ad cor meum, ubi ego sum quicumque sum. uolunt ergo audire confitente me, quid ipse intus sim, quo nec oculum nec aurem nec mentem possunt intendere;

(23) アウグスティヌスは「第一四九詩編講解」を終えるにあたって、聖なる者たちのこととして、以下のように語っている。*cf. op. cit.* 149, 16, Per totum mundum, per uniuersas gentes hoc sancti agunt, sic glorificantur; sic exaltant Deum in faucibus suis, sic laetantur in cubilibus suis, sic exsultant in gloria sua, sic exaltantur in salute, sic cantant canticum nouum, sic dicunt Alleluia, *corde, ore, uita.* Amen. また、*op. cit.* 148, 2 でも語る。Nunc ergo, fratres, exhortamur uos ut laudetis Deum; et hoc est quod nobis omnes dicimus, quando dicimus: *Alleluia.* Laudate Dominum, dicis tu alteri, dicit ipse tibi; cum se omnes exhortantur, omnes faciunt quod hortantur. *Sed laudate de totis uobis ; id est, ut non sola lingua et uox uestra laudet Deum, sed et conscientia uestra, uita uestra, facta uestra.*

(24) *Sermones de* Vetere testamento, 37, 6, *Quidquid carne*

*operamur, in promptu est; quidquid spiritu, in secreto.* Operari autem carne et non operari spiritu, quamuis bonum uideatur, utile non est. Operari autem spiritu et non operari carne, pigrorum est. Inuenis hominem porrigentem manu elemosinas pauperi, nec tamen de deo ibi cogitantem, sed hominibus placere cupientem. Lanea uestis uideri potest, interiorem lineam non habet. Inuenis alium dicentem tibi: 'Sufficit mihi *in conscientia* deum colere, deum adorare. Quid mihi opus est aut in ecclesiam ire, aut uisibiliter misceri christianis?' Lineam uult habere sine tunica. Non nouit, neque commendat talia opera mulier ista. Dicenda sunt quidem et docenda spiritalia sine carnalibus, sed illi qui accipiunt debent et tenere spiritalia, et non carnaliter operari carnalia. INVENIT haec mulier LANAS ET LINVM, ET FECIT VTILE MANIBVS SVIS. Lanae istae et linum hoc in scripturis sanctis est. Multi inueniunt, sed nolunt facere aliquid utile manibus suis. Inuenit, et fecit. Cum auditis, inuenitis; cum bene uiuitis, facitis.（テキストは CC. による。）オドネルはこの箇所をあげ、ウィクトリヌスとシンプリキアヌスの「壁」のやり取りに関する注で、洗礼などの儀式に対するアウグスティヌスの考えをよく示しているとしてあげている。*cf.* O'Donnell, *op. cit.* p. 21. なお、上記説教の一〇節に、「善き conscientia は善きおこないをおこなう。兄弟たちよ、いったい何が、善き conscientia よりも甘美だろうか。もしそれがなく、悪しきそれが突き刺すならば、すべては苦くなる」とある。

(25) 本稿第三章の（四）を参照のこと。

(26) *Ps.* 15, 8（*Act.* 2, 25 に引用される）に関係づけるもの、O'Donnell、CC.。*Ps.* 18, 15 に関係づけるもの、Desclée 版、Chadwick 訳。Labriolle 訳、服部訳、山田訳、Capello 訳、Pléiade 版は、*Ps.* 22, 5 と 49, 8 に関係づけている。宮谷訳は、*Ps.* 18, 15 を除く三つをあげる。参照箇所を掲げない近代語訳やテキストも多い。例えば、Skutella、Loeb（Watts 訳）、Gibb & Montgomery、Sheed 訳、Boulding 訳、Bourke 訳、Pine-Coffin 訳、Ryan 訳、Everyman's Library（Pusey 訳）、Everyman's Library（Burton 訳）、Bernhart 訳、Reclam 版、Landi 訳、BAC. など。

(27) *Enarr. in* Ps. 18, I, 15, *Et erunt ut complaceant eloquia oris mei, et meditatio cordis mei in conspectu tuo semper* (*Ps.* 18, 15). Meditatio cordis mei non ad iactantiam placendi hominibus, quia iam nulla superbia est; sed *in conspectu tuo semper, qui conscientiam puram inspicis.*

(28) *op. cit.* 18, II, 16, ... humilis anima in occulto, ubi Deus uidet, uult placere; ut si placuerit hominibus de bono opere, illis gratuletur quibus placet bonum opus, non sibi cui sufficere debet quia fecit bonum opus,

*Gloria nostra*, inquit, *haec est, testimonium conscientiae nostrae* (2Cor. 1, 12).

(29) *Ps.* 22, 5 に関係づけられるのであれば、これとは違ったニュアンスをもつ。苦悩の中にある者（アウグスティヌス）を神は放棄せず、その面前に食物を（シンプリキアヌス）を差し出してくれた、ということ。これも魅力的な解釈である。

【付記】本稿は、第一一二回教父研究会（二〇〇五年三月一九日開催）の発表原稿を、内容をできるだけ忠実に保存しつつ、求められた長さにまとめる努力をした結果である。発表の際に頂戴した、様々なアドバイスや批判にこころから感謝する。当日に口頭で、あるいは本稿で、応えることができなかった点に関しては今後の課題としたい。